

SAO～Real in the F i
c t i o n～

マンソン

ソードアート・オンライン〜インフィニティ・モーメント〜を元にし、存在していたかもしれない攻略プレイヤー・カインの物語。

以前から考えていたシナリオを明確にするために文字化したメモのようなものです。

結構飛び飛びになると思います。

カインサイドのヒロインはシリカとストレアになります。

途中から、それぞれのルートを分けて書いていく予定です。

余裕があれば、ロスト・ソング以降の作品も描いていきます。

目次

道のり

決闘そして新たな始まり

道のり

インフィニティ・モーメント開始前、1層から75層までのパートとなります。
まだストレアが登場できないので、登場ヒロインはシリカのみです。

「この世界でHPがゼロになれば、その者の脳がナーヴギアによって焼き切られ死に至る。文字通りデスゲームとなった」

ソードアード・オンライン。

次世代型VR装置『ナーヴギア』の世界初のVRMMORPG大作として、世界中から賞賛されると思われていたゲームは、一瞬で世界から恐れられる恐怖のゲームと化した。

ただ、ゲームの中に囚われてしまった俺たちはそれを知る由は無かったのだが。

（このゲームの世界が、俺たちにとっては生死を賭けた『現実』になっちまったってことか――）

だが多くのプレイヤーが現実に戻れない、死ぬかもしれない世界に閉じ込められてしまったことに顔が蒼白してしまっているのにも関わらず、

俺は一抹の喜びを感じ取っていた……。

S A O がデスゲームと化してから、もう一年が経過した。

ゲームを脱落してしまう人間は後を絶たない。

モンスターに倒されてしまう者、

終わりの見えないデスゲームに絶望して自殺してしまう者、

そしてプレイヤーによって殺されてしまう者――。

しかし俺はまだ生き残っている。

それも攻略組と言う、最前線で戦う者たちの一員として。

最初の一ヶ月は、始まりの街から出ることが出来なかった。

ワクワクしていたと言っても、それは公的にVRMMOに浸れるという意味でだ。

やはり死ぬかもしれないフィールドに踏み出る勇氣は無かったんだ。

ゲームを攻略したいという根っからのゲーマーたちは死を恐れず、既に前線を走り始めていたのにも関わらず。

それでも俺が街を出て攻略組を追い駆けはじめたのは――同じく始まりの街に引き籠もっている人たちを現実に戻してやりたいと思ったからだ。

偽善かもしれない。

それでも、前に進む為には十分だ。

俺は荷物をまとめ、第1層フィールドエリアへと足を踏み入れた。

.....。

あれから何か月も経過し、俺は何とか攻略組にまで追いつくことができた。
長らく使ってなかったコミュ力をフル活用したので、中々苦労したが……。

（他のメンツに比べて、情報の無い強敵と戦う経験が少ない以上、せめて他の奴等より剣の修練度を上げないとな）

俺は攻略層より下の階層フィールドで素振りをしていた。

モンスターと戦うのも良い訓練だが、こうして素振りをして武器と一体になる感

覚を研ぎ澄ますのも忘れてはいけないんだ。

(……よし、素振りはここまでだな。モンスターと戦闘しに行くか)

規定していた500回の素振りを終えた俺は、武器を背中に納めて移動を始めた。素振りがしやすいようにモンスターが極力現れないエリアを選んでいたので、モンスターに遭う為には場所を変える必要性があるからだ。

(ん……?)

ある程度、森の中を進んでいたら、自然音とは別の音が聞こえてきた。その正体はすぐに気付いた。

これは、ソードスキルを発動している音だ。

だが……連撃数が俺の知っているそのソードスキルよりも多い。

どういうことだ？

俺は念の為、気配と足音を忍ばせてその音の方向へと近付いた。

（あれは……キリトか）

森林フィールドの僅かなスペースにいたのは、攻略組でも少し名が売れているソロプレイヤー、

《黒の剣士》キリトだった。

（両手のそれぞれ片手剣を持ってソードスキルを!? 二刀流スキルなんて聞いたことがないぞ!!!?）

自身が習得していない武器種のスキルも、ウインドウを開けば全て確認することができる。

だがそこに二刀流の文字を見たことはない。

二刀流等、スキルに存在しない武器を振るうことは可能だ。

だがその場合は、ソードスキルを放てないだけにあらず、剣も握ったことがない現代人が振るいやすくなるようにしてくれるシステムアシストの恩恵も一切受けられなくなってしまうのだ。

これがないと、プレイヤーの技量によってはダメージが激減してしまうのだ。しかし目の前のキリトは間違いなく、二刀流状態でソードスキルを使っている。連撃数が多かった謎は解けたが、結局二刀流スキルという大前提の謎が解けていない。

(……思い切って聞くしかないな)

俺は忍んでいた気配をわざと解除し、キリトがいる開いたスペースに足を踏み入れた。

「よ、キリト」

「!! カ、カイン!?!」

一応、キリトとは個人的な友好もある。

まだ攻略組を追い駆けている途中、武者修行目的でフィールド内にあった隠しダンジョンに潜り込んでいたことがあるのだ。

自分の適正レベルより少し高いダンジョンだったので、ギリ貧で少しずつ追い込まれていた。

そんな時にキリトが助太刀してくれて、ダンジョンを出るまでパーティーを組んでくれたのだ。

彼は隠しダンジョンの奥にあるレアアイテムの情報を手に入れる為に来ていたらしい。

片や武者修行、片やレアアイテムの入手。

目的が合致していなかったからこそ、仲良く出来たとも言える。

「見られちゃったか……」

「ああ、ビックリしたよ。それ、ユニークスキルなのか？」

ユニークスキル。

文字通り、特異的なスキルということだ。

攻略組のトップの一人、ギルド《血盟騎士団》の団長ヒースクリフという男が、大盾というユニークスキルを持っていることで有名だ。

あれだけだと思っていたが、まさかキリトも持っていたとはな。

「……そうだ。その、悪いんだが……」

「ま、隠れて特訓してるくらいだしな。ユニークスキルともなればやっかみも多いだろうし、気持ちは分かるよ」

バツが悪そうにしているキリトに、俺は同調を示す。

といっても、無条件に受け入れたりはしないが。

「その代わりと言っちゃなんだが……二刀流のソードスキル、全部見せてくれない

か？」

「ソードスキルをか？」

「ああ。データとして存在する以上、今後人型のボスが二刀流ソードスキルを使ってくる可能性を否定できないだろ？ 知っておいて損は無いからな」

俺が交換条件の理由を説明すると、キリトは「なるほどな」と納得している様だった。

でもこれは口から出まかせに近い。（まあ完全に考えていなかったわけじゃないが）

本当の理由は、「知りたい」のではなく「覚えておきたい」からだ。

「わかった。じゃあそこに立っていてくれ」

「おう。ド派手に頼むぜ！」

俺は樹の幹に背中を付け、リラックスした状態で二本の剣を構えるキリトの姿を

逃すことなく見たのだった。

三ヶ月後、俺は《迷いの森》と呼ばれるフィールド内で一人の少女と出会った。パーティーを組んでいたメンバーから離脱して彷徨っていたところ、モンスターに襲われて身代わりとなった使い魔のモンスターが死亡してしまったらしい。

彼女の名前はシリカ。

「きゃああ！ ……………あ、あれ？」

「大丈夫か!？」

やられかけたシリカを助けた俺は、47層にて使い魔の蘇生が可能かもしれないアイテムが存在することを教える。

彼女は一人で行こうとしたが、適正レベルを超えたフィールドなので俺はそれを看過できず、同行することにした。

「あの……」

「ん？」

「どうして会ったばかりの私に、ここまでしてくれるんですか……？」

シリカは会った時からハッキリと視線を合わせることはない。

どうやら男性に対して強い苦手意識を持っているようだ。

《迷いの森》から街に戻って来た時、何人かの男性プレイヤーに好意的な声を掛

けられていた。

下心しか感じない結婚の申し込みを何度もされ、嫌になってしまったんだろな。そんな彼女を納得させる為には……。

俺の本心話を話すしかないだろう。

「……ゲーム内で現実の話をするのはタブーだけど、自分から自分の話をする分には構わないよな」

「現実……です、か？」

いきなり話が現実の方へ飛んだことにシリカが呆気にとられる。

けれど彼女の信頼させるには必要な話なんだ。

「数年前、俺は交通事故に遭ったんだ」

「こ、交通事故……？」

「ああ。運良く命は助かったけど、それによって俺は体のほとんどが動かさなく

なってしまったんだ」

昔は元気に友達とサッカーをしているようなアウトドア派だった。

サッカーボールが公園の外に出て行ってしまったので拾いに言った時、トラックが衝突してしまったんだ。

一命は取り留めたが、重大な障害が残ってしまった。

「動かせるのは、首から上と左手だけだった。日常生活のほとんどは介助なしには出来ない身体になってしまったんだ」

「そうだったんですね……」

同情してくれているのか、シリカは顔を少し伏せる。

「そんな時にナーヴギアを知ったんだ。この世界の中なら体を自由に動かせるかもしれない。俺は直ぐにソードアート・オンラインにベータテスターに応募したよ」

あくまで脊髄が運動命令を通してくれなくなっただけで、脳から発信はされているからな。

実際にやってみるまで不安はあったとは言え、大丈夫だとは思っていたんだ。

「そして運良くベーターテスターになれた俺は、すぐさまこの世界に飛び込んだ」

「ベーター、だったんですね」

「そうだよ。……あの時の嬉しさは今度もずっと忘れない。もう二度と走ることは出来ないと言われた脚が、自由に動かせるんだ。泣きながら草道を走り回ったよ」

泣きながら走り回って、

泣いてるせいで視界が不明瞭になって転んで、

それでも嬉し涙が止まらない。

この記憶は、強く焼き付けられている。

俺がVRMMORPGに憑りつかれたのも当然と言える。

「結局、楽しく遊び回れると思っていたこのゲームは、制作者本人によって恐ろしい死のゲームと化してしまったけれど……」

「そう、ですね……」

彼女は情報が十分に出回り、気を付ければ十分に遊べる範囲でSAOを冒険している、所謂《中層》プレイヤーだ。

つまり彼女も死を強く恐れているんだ。

「最初の一ヶ月は怖くて始まりの街から出られなかったよ。でも、街の中に居る色んなプレイヤーを見て、俺は一つ決心をしたんだ」

「決心、ですか？」

「ああ。俺は現実世界では助けられてばかりだ。だからせめて、自由に身体を動かせるゲーム内だけでは助ける側になりたいと」

そう言うのと、シリカは俺の顔をジッと見つめてくる。

彼女の中で俺に対する抵抗感はほとんど無くなったらしい。

「だから、むしろこっちがシリカにお願いしたいんだ」

「え？ カインさんがですか？」

「俺は困っている人を見捨てたくないんだ。だから、少し言い方は悪くなるけど……シリカだから助けたいってわけじゃないんだ。俺の我が儘なんだよ」

シリカは少しだけ残念そうに眉尻を下げる。

自分を軽んじられたような言い方だからな、仕方ない。

「俺に、君を助けさせてもらえないかな？」

とはいえまづは全てを話しきる。

これが嘘偽りない俺の本意だから。

少し不安はあったが、シリカの頬が緩んだ。

「……はい。宜しく願います、カインさん」

「ありがとう。よろしく、シリカ」

明日、一緒に47層へと行く約束を取り付けることが出来た俺たちは、それぞれの宿部屋へと戻った。

そして47層で、俺たちは無事にピナの蘇生に成功した。

道中、シリカはずっと俺に笑顔を向けてくれていた。

同行してくれるパートナーが笑ってくれていると、こっちも嬉しくなれる。

しかし街へと戻る直後、別の事件が発生した。

シリカが《迷いの森》で離脱したパーティーメンバーの一人が、彼女に仕返す為と言って仲間を連れてきたのだ。

そいつはプレイヤーを行ったレッドプレイヤーでこそなかったが、殺人ギルド《ラフィン・コフィン》の一員であることが判明する。

「悪いけど、それじゃ俺には届かないよ」

「こ、こいつ、攻略プレイヤーだ!!」

結果だけ言えば、仲間を含めた敵全員が俺のレベルを下回っていた為、自動回復分も削れずに退散してくれた。

そのせいでシリカに俺が攻略層のプレイヤーだとバレてしまったが。

……特別隠していたわけではないけどさ。

でもシリカは大きなショックを受けていた。

「ごめんな、黙ってて」

「行っちゃうんですね……カインさん」

「こういった人助けも大事だけど、やっぱり一番の人助けはみんなをこの死と隣り合わせの世界から解放してあげること、だからね」

無事に街まで帰ることが出来た俺たちは、すぐさま別階層へワープする為のポータルに来ていた。

そこでシリカと別れる前の最後の会話をしていたのだが、彼女の表情は使い魔のピナがいなくなった時とほぼ同列の表情になっていた。

その顔を見て助けようと決めた俺の性的に……どうにも無視できなくなってしまった。

(……そうだ。アレがあるじゃないか)

俺の脳裏には一つの思い当たりがあった。

「また会えるさ、シリカ」

「……はい」

シリカは顔を伏せたまま、頷いてくれた。

まあ彼女にこれを頼むにはまだ少し準備が必要だからな。
そんなことを考えつつも、俺もシリカと再会できることに内心喜んでいる節があった。

あれからかなりの時間が経過した。

俺たちは始まりの街でデスゲームの開始を聞かされてから……もう二年が経過した。

それまでには色々あった。

そしてまだゴールの100層にはまだ遠い。

第75層のボス・スカルリーパー。

74層のボスから一気に手ごわさが上がり、俺たちはより一層結託してボスに挑んだ。

最小限の犠牲で、ボスは討伐された。

《大盾》と《二刀流》というユニークスキルを持つ二人のプレイヤーがいたから、とも言える。

ボス戦から解放された喜びと疲れで皆が束の間の寛ぎを楽しもうとした時――

「……やはり、貴方だったんですね。ヒースクリフ、いや――茅場晶彦」

キリトが不意の死角からヒースクリフを攻撃し、本来不可能な動きでそれを避けた彼の正体を見破ったのだ。

正直なところ、俺も茅場晶彦がプレイヤーとして潜り込んでいたことは想定して

いたし、ヒースクリフは候補の一人ではあった。

だが、まさかここであいつが当てるとはな……。

「流石だよ、キリトくん。その褒美として、キミには特別にここで私と戦う権利を与えよう」

そういつてヒースクリフが指を鳴らすと、キリト以外のプレイヤー全員が床に倒れてしまう。

勿論、俺も例に漏れず。

管理者権限により、強制的に麻痺状態にさせられたのだ。

そして、キリトとヒースクリフの1対1が始まってしまった。

（くそ……っ!! これじゃ、あの努力が台無しじゃねーか!!!）

激しく鳴り響く剣戟の音を聞きながら、俺は悔しさで歯を食いしばった。

何故なら俺はずっとこの時を待ち望んでいたからだ。
茅場晶彦を戦う時を――。

＊＊

「あ、カインさん！」

「シリカ、久しぶりだな」

「はい！ 本当……また会えるなんて」

俺はあの時の約束通り、シリカと再会した。

勿論、その時に想定していた頼みごとを彼女にする為だ。

「それでカインさん、私にお願いごとって……なんですか？」

「ああ。フィールドに移動しながら話すよ。あんま、他の奴に聞かれたくないからね」

俺はそう言って、シリカと共に街の外へと歩いていった。

「茅場晶彦との、決闘……ですか」

「ああ。その時は必ず来る。こんなスゴいゲーム作っというて、高みの見物だけってのは勿体ないってのは誰だっと思うことだろ？」

「それは確かにそうですね……」

周りにプレイヤーの気配もないフィールドエリアまで辿り着いた俺は、話を始めた。

隣で話を聞いているシリカの距離が前より近い気がするが、まあ気にすることもないだろう。

「そしてあいつはこのゲームを知り尽くしている。ソードスキルなんて使おうものなら、連撃全てを見切られて隙の部分に的確に反撃を入れられるだけだ」

「た、確かにそうかもしれません！」

「だから必要なだよ、ソードスキルに頼らない剣術が」

俺はそう言いつつ、ウインドウを開いて剣をアイテムバックから取り出す。だがフィールドに出ている以上、俺は既に一本の剣を背中にしょっている。つまりこれは二本目。

「だから付き合って欲しいんだ。——二刀流の特訓にさ」
「に、二刀流ですか……!?」

シリカは分かりやすく、目を丸くして驚いてくれた。
だから俺はもう少し丁寧に教えてあげることにした。

二刀流は本来ユニークスキルであること。

それを所持しているプレイヤーからソードスキルを一通り見せてもらったこと。そしてそれをマスターしたいと。

……まあシリカは攻略組じゃないし、教えても問題ないだろう。

悪いな、キリト。

「で、でもカインさんはそのユニークスキルを持ってないんですね？」

「勿論だ。だから俺はソードスキルを放てないし、それどころか剣の振りのアシストすら存在しない」

「そ、そんなの無茶ですよ！」

システムアシストすら頼らない剣の訓練。

それはもう、本物の剣士になると言っているようなものだ。

数ヶ月、いや数年程度でだってどうにかなるものではない。

だからシリカは、せめて普通の武器種でソードスキルを使わない戦い方を学ば

きだと提案してきた。

しかしそれではいざという時に暴発する恐れがある。

窮地に追い込まれた時、人間は咄嗟に慣れた動きをしてしまう生き物だからな。

「シリカの言う通り、まだ俺の二刀流はまともに振れたもんじゃない。だから訓練の間、護衛を頼みたいんだ」

「護衛……ですか？」

「この状態でモンスターに襲われたらひとたまりもないだろう？ だからピナにも協力してもらって、モンスターが現れそうになったら警告して欲しいんだ」

そうなれば、パパッと剣一本をストレージにしまえばいいからな。

俺は本来槍使いだが、キリトの二刀流を目撃してからは、片手剣のスキルも習得するようになった。

その後、シリカは護衛の頼みを承諾してくれた。

だから俺は攻略の合間を縫って、度々彼女と会って二刀流の特訓を続けたんだ。

最終的には、中層程度のモンスターなら倒せる程度には仕上がっていた。

（このペースを維持できれば、100層に辿り着くことには渡り合えるレベルにまで行けるはずだ）

俺はそう確信した。

＊＊

（まさか、こんなに早く奴との決闘が行われるなんて……っ）

実際には俺は茅場晶彦との戦いの舞台にすら上がれなかった。

あの特訓は無意味だったのだろうか。

（あれは……）

そんな時、俺の視界の右端にあるアイテムが目に入った。
それは麻痺状態を回復するのに使用する消痺結晶だ。

（あれが……使えば……！）

この麻痺は茅場が管理者権限によって付与した麻痺だ。
アイテムは効かないと考えるのが定石だ。

だが目の前に可能性がある以上、縋らずにはいらなかった。
シリカと共に鍛えた二刀流を無駄にはしたくない。

その一心で。

それでも俺の右腕は動かない。

——同じだ。

これは俺の現実の右腕と同じなんだ。

今の俺のアバターは、全身麻痺状態の現実を彷彿とさせる。

（何も……できないのか……俺は）

視界の奥ではキリトとヒースクリフが死闘を続けている。

しかし、大盾による強靱な守りとユニークスキルによる鈍重な攻撃が、確実にキリトを押している。

いつキリトが焦り、ソードスキルを暴発してしまうか、もう時間の問題のように見えた。

（くそがああああ!!）

俺は右腕に全身全霊を込める。

ビキビキという幻の音が俺の耳には聞こえてくる。

そして、右腕の悲鳴のような強烈な痛みも。

アバターではこんな痛みは発生しない。

だが俺は知っている。

この痛みは、現実の俺はリハビリをしようと麻痺している身体に強引に力を込めた時に感じたものを全く一緒だ。

現実の俺は、それで諦めてしまった。

医者に「もう動かすのは難しい」と言われたからもあるかもしれない。

でも俺は逃げてしまったんだ。

だが……

俺はもう……

『カインさん！ カインさんならきっと出来ます！ 私、信じてますからねっ』

俺は心に誓ったんだ!!

俺が——茅場晶彦を倒すんだって！！！！

その瞬間、キリトがソードスキルを暴発させてしまった。

彼自身マズいとは思ったが、もう発動した連撃が止まることはない。

それを待っていたと言わんばかりに、ヒースクリフはキリトの連撃を防いでいく。

最後に訪れる、大きな隙を狙って。

(させるかあああああああああああああああああああああああ
あああ!!!!!!)

プルプルと、右腕が震える。

普段と比べれば格段に遅い。

でも、動いていた。

幻痛は現実で味わったものより格段に強くなっている。

なのに俺はもうそれをほとんど認識していなかった。

そして俺は、

右手で消痺結晶を掴みとり、

握りつぶすようにして発動させた。

「茅場、晶彦おおおおおおおおっ！……！」

「っ……！」

全身の痺れが無くなった俺は、背中の剣を抜き、全速力で二人の間に入り込む。
キリトの連撃を全ていなしきったヒースクリフが放った止めの一太刀を、俺の剣
が止める。

「カイン……！？」

「……ほお。あの麻痺状態を脱したと言うのかね」

ヒースクリフは冷静な物言いだったが、その目が大きく見開かれていた。

あいつは盾を構えつつも、ウインドウを開いて何かを確認している。
俺はその隙にキリトに駆け寄る。

「キリト、大丈夫か」

「あ、ああ……お前のお陰で、何とか」

あの一撃が自分にとっての致命傷であることが分かっていたキリトは半ば放心状態だった。

現実であれば脂汗でびっしょりになっていたことだろう。

「ふむ……。私の強制麻痺そのものは解除されていないようだが……」

ヒースクリフはウインドウで俺のステータス異常の確認をしていたようだ。確かにもう、俺の身体にまだ痺れのようなものが残っている。

いくらか体の動きが鈍っているとは思う。

だがもう、動けない程ではない。

しかし次の瞬間、その痺れはスーッと消えていった。

「面白い。自力で戦いの場に赴くことが出来た君を讃えて、この決戦に参加することを許可しよう」

最後にウインドウをタップしたヒースクリフは剣を構え直しながら言ってきた。どうやら俺の強制麻痺だけは解除してくれたようだ。

今度は俺はウインドウを開き、ストレージに入れてあった剣を一本取り出す。そして背中の剣を今一度引き抜く。

「……その言葉を待っていたぜ。俺はずっと、あんたと戦う時を待っていたんだ！

」

「！ 二刀流かい？ しかし君にそのスキルは存在しない」

「んなこと分かってる。だがソードスキルも、システムアシストもあんたとの戦い

にとっては邪魔なものだ。——だから俺は、《本物の剣》で戦う」

この場に居る俺以外のプレイヤー全員が驚いているのが目に見えて分かる。

普通なら、そんなもの自殺行為だからな。

だが、ヒースクリフはすぐに俺の本気を感じ取ったようだ。

「——まさか、君のようなプレイヤーが現れるとはね。先程のは愚問だったようだ、撤回しよう」

ヒースクリフは笑っていた。

今までに見たことがない微笑み。

初めて、ヒースクリフが俺のことを見たような気がした。

「カイン、本当に大丈夫なのか？」

「お前に見せてもらってから、ずっと特訓してきたんだ。もう後には引けねーよ」

気を取り戻していたキリトが俺の横に並び、最後の確認を取ってくる。

勿論、俺は自信たっぷりに頷いてやる。

正直言えば不安はある。

茅場晶彦本人と戦うのは、早くても90層以降だと思っていたから、俺の我流二刀流はまだ未完成だ。

けれど、キリトと協力できるなら、あいつにきつと敵う。

「……そっか。なら、任せた」

「ああ、お前の背中を守ってやるぜ！」

俺とキリトはお互いの剣を軽くぶつける。

キンという音が、胸に心地よく鳴り響いた。

「行くぞ！」

「おう！」

「来たまえ！」

ヒースクリフとキリトと俺。

三人の剣士による最後の戦いが、今度こそ始まったのだった。

個人的にゲームがバグったからヒースクリフがキリトに負けたというのが少し納得できなくて、オリジナル主人公と共闘するという展開を考えました。

まあ麻痺状態の解除に関しては少し強引かもしれませんが、そこはご容赦を。

決闘そして新たな始まり

インフィニティ・モーメントの導入部分になります。
ようやくストレア登場です。

＊＊

ボスが消滅し、本来なら静まり返っている75層ボスエリア。
しかしそこでは未だに剣戟が鳴り響いていた。

「はあっ！」

キリトが右手に持つ剣で斬りかかる。
ヒースクリフはそれを盾で受け流す。

それでもキリトはすぐさま左手の剣での連撃に切り替える。

しかしそれもまた剣を合わされることで流される。

キリトはソードスキルを発動していた。

ヒースクリフが攻撃を完璧に躲せるのも当然と言える。

「……」

そしてヒースクリフは連撃と連撃の合間に僅かに存在する、キリトのボディがから空きになる瞬間。

そこにピンポイントに剣を差し込みに行こうと剣を僅かに引く。

だがそこでイレギュラーが入り込む。

「そこだ!!」

「っ！」

二刀流ソードスキルを知り尽くしているのは、制作者の茅場晶彦と所持者のキリトだけではない。

キリトから見せられたそれを反復練習し続けたカインも、熟知しているのだ。

故に彼はヒースクリフは突くであろう隙のタイミングをカバーするように、一太刀を振り下ろした。

当然、ヒースクリフはそれを避けることに動力をさかねばならず、キリトへの攻撃は中断せざるを得なかった。

だがそうなれば、必然的にソードスキルの途中であるキリトの連撃が再び襲い掛かる。

「く……っ！」

ゲームの創造者であり、チートとも言える動きをすることができるヒースクリフは仮に二対一であっても有利的に戦えるはずだった。

だが、彼は確実に押されている。

その理由はやはり、カインだった。

不足している剣術を補ってくれるシステムアシストは、言い換えれば皆の剣の振り方を規格化していると言っても過言ではない。

しかし今のカインはその縛りの外に居る。

彼の剣術は、完全にヒースクリフの想定外なのだ。

＊＊

(……くそっ)

俺は焦っていた。

今、キリトと共闘することでヒースクリフを押しているのは事実だ。
だが決定的な一打を与えることが出来ない。

(このままだと、マズい！)

システムアシストに頼らない剣術を手に入れた俺ではあるが、それはまだ付け焼刃のようなものだ。

実戦経験こそあるが、「長引かせた」ことはないのだ。

他のプレイヤーと比べて、剣の振りに圧倒的に集中力を割かねばならない俺は、その限界を感じ取り始めていたんだ。

やはり、まだ決戦に用いるには早かったのか……。

俺がそう思った時、あの現象が巻き起こった。

ズザザ……ズザザ……、と。

ボスエリアの所々がブレたのだ。

（なっ、何だ？）

まるでバグったようだ、と脳裏によぎる。

いや、これはゲーム内なんだから実際にバグっていてもおかしくない——そん

な思案の続きが思い浮かんだ直後、今自分が戦闘中であることを思いだす。

（早速、集中を途切れさせてるんじゃないやねえよ！　今は、ヒースクリフを倒すことだけを考えるんだ！）

少し緩んでいた剣を握る手の力を入れ直す。

キリトは今ソードスキルのクールタイム中だ。

俺が我流連撃で休ませてやらないとな。

「行くぞ!!」

両手の剣を交互に打ち込んでいく。

ヒースクリフは変わらずそれを盾を剣で受け止めているが……。

（っ!?　どうした?）

俺は強烈な違和感を感じ取っていた。

連撃を受けているヒースクリフは、明らかに今まで以上に押されていた。

勿論、疲労が溜まったことで弱った可能性はある。

しかし疲労により弱るのは自分も同じ。

いや、むしろ我流剣術に精神力を消費する俺の方が、弱るペースが早いハズだ。

（理由は分らない。でもそれが好機であることに違いはない！）

俺は左手により力を込め、最後の一撃をヒースクリフに浴びせる。

無論それは盾によって防がれたが、衝撃を吸収しきれなかったヒースクリフが少し後ずさってしまう。

それを、キリトが逃さなかった。

「はああああああああああっ!!」

俺の脇を抜け、ヒースクリフに黒い剣を突き刺す。

体勢を崩していた彼は、ついにそれを防げずに体に受けてしまった。

一気にヒースクリフのHPゲージが0になる。

……これで、決まったのか？

「……………」

ヒースクリフは何も言わないまま、膝を地面に付け……消滅した。

「……………」

「……………」

俺たちは警戒を完全には解けず、沈黙のまま立っていた。

本来のボス戦なら勝利した瞬間に、それを知らせるウインドウが表示されるから

だ。

しかしイレギュラーな戦闘であつた今はそれが無い。
だから実感を感じられなかったのだ。

「勝つた……のか？」

「……みたい、だな」

俺とキリトはお互いの顔を見合わせて、状況の共有を行ったことでようやく構えていた剣を下ろすことが出来たのだった。

……………。

結論から言えば、茅場晶彦を倒すことに成功したにも関わらず、俺たちはSAO

から解放されることは無かった。

キリトが戦いを始める前に、茅場自身がそう言っていたにも関わらずだ。

麻痺が解けて立ち上がることが出来る様になった、攻略組皆で相談し、俺たちは76層に進むことにした。

しかしそこで更なる事態が巻き起こる。

76層に出て、75層との扉が閉じた途端、そこが開かなくなってしまったのだ。俺たちは急いでポータルも確認をしたが、想像通り75層以下の階層にアクセスできなくなっていた。

だが悪い事態はそれだけではない。

攻略組全員が所持していた武器や防具が全て文字化けしてしまっていたのだ。性能もガタ落ちしてしまっている。

これも全て、ヒースクリフとの戦いの最中に見た謎のバグの影響なのだろうか……。とはいえ、SAOから解放されずに次に進んだ以上、攻略組の目標は変わらない。100層をクリアするという正当な方法で、現実世界へと帰る。

俺たちは今再び意志をまとめ、目標に向かい猛進することを再決意したのだった。

ポータルから立ち去ろうとした時、誰かがポータルから出現した音が聞こえた。始めはピンク髪の女の子だった。

そこまで交流は無い為、俺はハッキリと思い出せなかったが、キリトとアスナが彼女と面識があったようだ。

リズベット、下の階層にて鍛冶屋を営んでいた。

けれど、来てしまったのはその子だけではなかった。

「カインさんっ！」

「し、シリカ！」

ポータルには我流二刀流の特訓に付き合ってくれた彼女も来てしまっていた。シリカの方は俺に会えて嬉しそうだが……。

「バグのようなものが発生して、それを見ていたらカインさんのことが心配になって……」

「そうか……」

理由を説明してくれたシリカに、俺も説明をしてあげることにした。

もう、75層以下には戻れなくなってしまったことを。

「じゃあ、もう戻れないんですね……」

「ああ。来る前にメールで知らせられれば良かったんだけどな」

「——いえ、仮に事前に知ってても私は来ていたと思います」

少し残念そうな顔をしていたシリカだったが、すぐに俺の言葉を否定してきた。

「どうして？」

「だって、カインさんが降りられなくなった以上、私が行かないと会えないですか

ら！」

笑顔でそう答えたシリカに、俺もついつられて笑ってしまう。

まあその通りだ。

彼女の行動力のお陰で、こうして再会出来たんだ。

「私、攻略組の皆さんみたいに強くはないですけど、100層を攻略するまでのお手伝いをしたいです！」

今まで《中層》プレイヤーであつた彼女には危険だ。

そう言おうとした。

けれど彼女の目は真剣だった。

その決意は、攻略組の皆と相違ない。

それを突っぱねる理由を、俺は持ち合わせていなかった。

「……わかった。これからも宜しく頼むよシリカ」

「はいっ！」

手を差し伸べると、シリカは頷いてそれを両手で握り締めてくれた。

……周りからの視線が突き刺さっている事実は、意識しないように心掛けた。

ただ、バグの影響はまだ続いていた。

本来この世界には囚われていたかった二人のプレイヤーが、新たに巻き込まれてしまったのだ。

一人は街中にある林の中に佇んでいた金髪の少女だ。

彼女は俺たちを——いや、キリトを見た瞬間に叫んだ。

「お兄ちゃん」と。

話を聞くと、彼女はキリトとは義理ではあるがれっきとした妹だと言う。

どう見ても似ていないが、それは彼女がアルヴヘイム・オンラインという別のV

RMMORPGで作ったアバターがそのまま適用されたかららしい。

まあ俺たちがリアルモデリングされたアバターなのは、『《始まりの街》で鏡を見ちゃったせいなんだからな。

リーファというプレイヤー名である彼女は、SAO事件に巻き込まれてしまった兄が心配になり、ついナーヴギアでSAOへのログインを試みてしまったのだと言う。

……恐らくは運悪くバグが発生した時間と被ってしまったのだろう。

リーファはデスゲームに巻き込まれてしまった事実に恐怖しつつも、共に攻略を進めることに同意した。

もう一人はリーファ以上に衝撃的な出会いだった。

文字通り、空から降ってきたのだ！

その兆候のようなものが空に浮かんだ瞬間、キリトがダッシュしていなければ間に合わなかっただろう。

こちらの少女の名前はシノン。

シノンはリーファと違い、SAOにログインを試みたわけではなく、ガンゲイル・

オンラインというゲームをプレイしていたら突如巻き込まれてしまったらしい。シノン是谁とも面識がなかった上に、ちょっとした人見知りがあったのか、リーファと比べると少し会話に時間はかかったが、最終的には仲間になってくれた。

そして更なるイレギュラー。

キリトの方から何かが光ったかと思いきや、そこから黒髪の少女が現れたのだ。

この場に居るどのプレイヤーよりも幼い彼女は、キリトとアスナのことを「パパ」「ママ」と呼んでいた。

当然ながらそのことに皆が驚いたので、慌てて二人が説明を始めてくれた。

詳細な説明は省かれたが、彼女はユイと言って、元はカードディナル・システムというAIだったのだという。

しかし何故かNPCとなっていた彼女は一度消されかけたらしく、慌ててキリトが自分のナーヴギアのス 트레이ジにデータとして避難させたのだと言う。

そして今、何故か避難したハズの彼女が再びNPCアバターとして復活してきたのだ。

バグの影響なのはあからさまだが……SAO内のデータベースのある程度アクセスできるユイとしても謎なのと言う。

結局、「パパ」「ママ」呼びについてはハッキリ言われなかったが、NPCをNPCとして扱わない二人のことなので何となくの想像はついた。

……………。

キリト、アスナ、リズベット、リーファ、シノン、ユイ、クライン、エギル、シリカ、そして俺。

ギルドを結成したわけではないが、俺たちは共に100層攻略を目指す仲間となった。

とはいえ75層での戦闘もあり、攻略を始めるのは明日ということになった。

今日の残りの時間は休息と準備に充てることになり、

俺は《アークソフィア》という名の街エリア全体の把握の為の散策を行っていた。

「……ん？」

その道中、謎の気配に気づく。

これは視線、だろうか。

誰かがずっと俺を監視しているような。

実を言うと視線を感じ取っていたのは、この街に着いてからにも何度もあった。けれどすぐに無くなってしまったので、気のせいだと思っていたんだ。

しかしこれだけ何度も感じ取るとなれば、さすがにもう気のせいでは片づけられない。

恐らくは気配遮断のスキルが相当高いので、こうもハッキリと分からないのだらう。

（今回は俺一人だし、そろそろ誰がつけてるのか確かめておこう）

俺は人ごみのある通りから外れ、人影のない路地裏へと歩いていく。

やはり、警戒の必要性が減った為か、後ろからの視線の気配が強くなる。

そこで後ろに向かって声を掛ける。

「どうして俺の後をつける。そろそろ、姿を見せたらどうだ」

しばらくは沈黙が場にうずまいていた。

けれど遂に角に隠れていた追跡者が姿を現してくれた。

「バレちゃあしょうがないねー」

その言葉と共に見えてきたのは、薄紫のウェーブがかったミディアムヘアの少女。
女。

……少女と言うにはかなりグラマーな体型ではあるけど。

しかし漂わせている雰囲気には、ただならぬものがある。

「あんた、タダ者じゃないな」

「うん。カインの言う通り、あたし強いよ」

紫の少女は俺に詰め寄ってくる。

ち、近い近い！

「あたしは、二刀流スキルを持つ《キリト》より、スキルなしで二刀流を使ったカインの方が、ずっと気になるんだよねえ」

その言葉に俺は驚きを隠せない。

キリトと共闘してヒースクリフを撃破した俺だが、それ以前から二人目のユニークスキルの所持者ということで俺よりもキリトの方が知名度が高いのは事実だ。ヒースクリフの正体を見抜いたのはあいつだしな。

けれど驚いた理由はそこではない。

「75層のボスエリアに居たのか？」

「うん、居たよ」

俺はこのグラマーな少女には見覚えが無かった。

攻略組のメンバーはそれなりの人数ではあるし、会話をしたことがないプレイヤーも存在する。

だが顔を一度も見たことがないプレイヤーはいないと言っていい。

攻略するから攻略組なのだ。

ボスエリアの攻略にはほぼ全員が参加するからだ。

だから全く見覚えが無いというのはおかしい。

本当にこの少女はボスエリアにいたのだろうか……？

しかし少女の方は俺の思考にはお構いなしに、ぐいぐいと引っ張ってくる。

「ねーねーカイン、もっといっぱいお話ししょ？ カフェとかでさ！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

強引に迫ってくる少女を、どうにも上手く振り切れない。

今までには無いタイプだったからだろうか。

それとも彼女に不思議な魅力があるからか。

「いーでしょ、カイン！　ねーカイン！」

「わ、分かった……。じゃあ名前を教えてください」

「ストレア。あたしの名前はストレアだよ♪」

ストレアと名乗ってくれた少女は、俺の同意を得られたこともあり、腕を引っ張る力がより強くなっていった。

俺は引きずられるようにして路地裏から表通りへと連れて行かれたのだった。

……これ、ハニートラップってやつなのだろうか。

脳裏にそんな不安をよぎらせながら。

その後は彼女が望んだカフェで色んな話をした。

彼女は俺から話を聞き出そうとしていたので、ほぼ全部俺の身の上話だったのだが。

彼女は75層ボスエリアでの詳細を知っていた。

キリトが茅場の正体を暴いたことや、俺が強制麻痺でも身体を動かしたこともだ。信じがたいが、やはりストレアはあの場に居たんだ。

散々話された後、ストレアは仲間たちとの合流を望んできた。

一波乱起きそうではあるが……ストレアなら仲良く出来るだろうと言う予感もあったので、それを承諾した。

そして俺はストレアに引っ付かれたまま、仲間たちのいるエギルの店へと戻ったわけだが、

まあ当然、知らない女の子を引き連れて戻ってきた俺を見たみんなは驚きを顕わ

にしていた。

「カ、カインさん!! その人は誰なんですかつ!!?」

特にシリカが大慌てし、俺の元へ駆け寄ってくる。

俺の背中にも何故か冷や汗が浮かんでくる。

慌てて誤解を解く為の説明をしようとしたのだが、ここでストレアが余計に誤解を与えてくる。

「フフツ、私とカインはラブラブなんだよぉ?」

「え、ええっ!!?」

ストレアの言葉を聞いたシリカは目に涙を浮かべて絶望しているように見えた。
な、何て事を言いだしたんだストレア!!

誤解を解くのにには割と時間がかかった。

こんな状況でもナンパできちゃうお気楽男だと思われるのはさすがに嫌だから……。

勿論、ナンパなんて人生でしたことないけど。

そして案の定、ストレアはあっさりとキリトたちへと馴染んでいた。

……唯一、ライバルに向けるような視線で見ているシリカを除いて。

「ま、とにもかくにも、」

俺はそこで気を取り直してみんなに声を掛ける。

「みんなで目指そう。残る層を全て攻略し、現実に戻るんだ！」

「ああ！」

キリトもそれに続いて大きく頷いてくれた。

他のみんなもハッキリと同意してくれた。

そんなわけで俺、カインによる物語の本当の幕開けとなったのだ――。

これにてインフィニティ・モーメントの導入が終了となります。

ここからはシリカルートとストリアルルートで章を分けて書いていこうと考えています。

恐らくはインフィニティ・モーメントとしての本筋シナリオはほとんどカットして、そのキャラとのイベントを中心に書いていく予定です。

SAO～Real in the Fiction～

著者 マンソン

発行日 2019 年 7 月 26 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/192893/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。